

大相撲大阪場所テレビ観戦記
優勝争いに焦点を絞って

張りのない体つきとひとまわり縮んだような体型、膝の動きが硬い身のこなし。初日の相撲を見たところで、横綱のこの先を読み取ることができた。案の定、照ノ富士は序盤を終えた所で休場となった。

地位確保に専心するばかりの大関には期待すべくもなく、残る期待が新大関だけに注がれるスタートとなった。東西の新関脇にも注目が集る中、**中日**を終えて表-1のような結果となった。

表-1 中日終了時点の地位別成績分布

	8戦全勝	7勝1敗	6勝2敗	5勝3敗
大関		御嶽海	貴景勝	
関脇		若隆景	阿炎	
小結				
平幕	高安	琴ノ若		逸ノ城、霧馬山、遠藤、若元春、琴恵光、琴勝峰、栃ノ心、錦木

先頭を走るのは大関から陥落した「元大関」で、その後を追うのが「新大関」という興味深い形になった。御嶽海のここまでの相撲を見ると、前進圧力を続けながら体全体で仕事をし続けている「良い動き」を感じさせたが、5日目に霧馬山に一方的にやられてしまうような相撲もあり、信頼度はどこまでかまだ見えぬ状況。一方高安は、御嶽海と同様に前進圧力をかけながらの、寄り身に投げに安定感が感じられた。相手の動きに翻弄されることはなく、機を待ち自分の相撲に持って行く辛抱強さもあり、大関昇進直前の強さを感じた。

そして**10日目**になると、御嶽海は苦手の北勝富士に全く手を出すことも出来ぬ間に土俵下へ運ばれるという負け方で脱落。これがきっかけになって崩れていくのか、それとも……と不安が過ぎた。

好成績者同士の星のつぶし合いもあり、ふるいの目に残った力士は表-2のようになった。

貴景勝も遠藤の巧みな相撲に敗れて、大関はトップ3に残ることは出来なかった。

表-2 10日目終了時点の地位別成績分布

	10戦全勝	9勝1敗	8勝2敗	7勝3敗
大関			御嶽海	貴景勝
関脇		若隆景		
小結				
平幕	高安	琴ノ若		霧馬山、琴恵光、栃ノ心、錦木

新関脇若隆景の、落ち着いたしかも技巧的にも優れた取り口が光っている。低い腰の構え、脇を締めた体勢、相手の動きを止めて浮き上がらせるような鋭いおっつけ、低い腰の位置から繰り出す寄り身。この相撲が「型」として定着したら、凄い力士が生まれるような気がする。

一方琴ノ若は、柔らかい大きな体で前へ前へ出ながら様々な動きを見せる若々しい相撲。欠点と言われていた立ち合いの踏み込みとあたりの弱さが消えてきた。

11日目を過ぎると、下位で好成績の者は上位とあたり、好成績者同士の直接対決が進み、日を追って絞られていく。11日目、若隆景の素晴らしいとしか言いようのない攻めに高安が屈して、遂に全勝力士が消えた。

そして4人いた3敗力士は2人になり、1敗・2敗・3敗それぞれ2人ずつの計6人に絞られた。

終盤の成績分布の推移を毎日埋めていくのが面白い仕事になった。(表-3参照)

12日目の直接対決は、「御嶽海対高安」と「若隆景対琴ノ若」。混戦となればいくらかの可能性のある3敗の貴景勝・栃ノ心も、生き残りを賭けることになったのだが、ここまでの11日間の相撲に「落ち着き・巧さ・力強さ」が感じられる二人が生き残った。この二人の直接対決は既に終わっており、残る三日間の展開次第では優勝決定

戦の可能性もある。

13日目、御嶽海は速攻相撲で若隆景に動く時間を与えることなく土俵外へ運んでしまった。さすがの若隆景も脇を固める時間すら貰えなかった。高安は貴景勝を捕まえることに手間取りはしたが、上手投げで下しトップの座を譲らず。また、琴ノ若は正代を一方的な相撲で寄り切り、大関を6勝7敗に追い込んだ。

14日目、高安対正代、琴ノ若対御嶽海、若隆景対貴景勝と三番が続き、大阪府立体育館は湧き上がった。高安はこれまでのような体全体を異動させていく前進圧力がない上に、上手を引いたところで安心して攻め込んでいき、正代の手首だけの掬いに屈した。両まわしを引いて、腰を落としてから攻めれば勝てた相撲だったのに惜まれる大事な一敗になってしまった。

これにより逆転の可能性もあり生き残らなければいけなかった御嶽海は、前半のような勢いのある寄り身は見られず琴ノ若の手さばきに敗れ、賜杯争いから脱落。勝ち越しからの相撲に「雑な感じ」が見受けられ、勝負を捨てるような取り口が感じられたのは残念なことである。

そして結びの一番は、貴景勝の執拗な突き押しに耐えてまわしをつかんだ若隆景が「巧さと強さ」を見せつけるような勝ち方で生き残った。大関の腕を払い除け続ける内に、大関の方が我慢できずにはたきに入った。若隆景の鍛えられた下半身は少々のはたきには動じない。はたきにつけ込んで素早くまわしを取り土俵際まで運んだ。かくして優勝争いは千秋楽にもつれ込むことになった。

千秋楽、琴ノ若は豊昇龍の厳しい攻めの後の見事な下手出し投げに破れて脱落し、賜杯争いは2敗の二人に絞られた。

高安は、勝ち越しを賭けた阿炎のがむしゃらな揺さぶりに翻弄されて、腰高のままの動きをつかれて破れた。さてこうなると、ことによると……と余計な想像をさせられたのだが、若隆景は正代の苦し紛れの右のねじこみに屈して3敗に後退し、優勝決定戦に突入。終って見れば琴ノ若には悔しい結末となってしまった。

優勝決定戦は、腰高ながら果敢に攻める高安に対し低い腰の位置で膝に余裕を持たせた体勢で反撃していく若隆景という図式で流れた。最後は土俵際の攻防となり、重心の低さと鍛え抜かれた下半身の力が繰り出す粘りと力が勝り、若隆景に軍配が上がった。

これまで何度も優勝の機会に恵まれながら達することができなかった高安に、期待と希望を叫ぶファンは数多かったのだが、残念な結果となった。しかしながら見方を変えれば、大関から陥落してからかなりの時が流れたが、再びこのような活躍が出来る力は素晴らしい。正代も怪しげな勝ち方で辛うじて大関の地位にぶらさがっているよりも、一度リセットしてから心身共に再スタートすることも大事なのではないかと、ついてながら感じた。

若隆景の181cm 130Kgの体はこれ以上大きくも重くもする必要はなく、鍛えたものが技と力になって躍動できる最適な状況と考えられる。今の相撲を続けて行けば、さらなる成長が期待できそうな器と見えた。

例によって、マスコミやジャーナリスト達が「大関取り」と騒ぎまくることだけが心配の種である。

表-3 10日目から千秋楽までの成績分布推移

	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目	千秋楽
全勝	高安					
1敗	若隆景、琴ノ若	若隆景、高安	若隆景、高安	高安		
2敗	御嶽海	御嶽海、琴ノ若		若隆景	高安、若隆景	
3敗	貴景勝、霧馬山、琴恵光、栃ノ心、錦木	貴景勝、栃ノ心	御嶽海、琴ノ若	御嶽海、琴ノ若	琴ノ若	高安、 若隆景

相撲記者クラブを真似て14日目終了時点で、恒例の「私が選ぶ三賞」の候補者を揚げてみた。

殊勲賞の定義を柔軟にして、新関脇の優勝を「殊勲に値す」とすべきと考えたのが記者クラブとの相違点。。

*殊勲賞=若隆景 *技能賞=若隆景 *敢闘賞=高安・琴ノ若

以上